神戸の勤労動員と企業

洲　脇　一　郎

Labor mobilization of students and industries in Kobe during the Pacific War

Ichiro SUWAKI

要　旨

動員される生徒や学校，労働力を必要とした企業の双方の側から神戸の勤労動員を捉えなおす。神戸経済の重工業化が飛躍的に進展するが，その一方で地方への工場の分散も進む。戦時下に「労務給源」として学徒が動員され，ついには「学生服の労務者」ともいうべき状況が出現する。動員される学徒の心情，教員の対応，受け入れ企業の動向などを社史や学校史，米国戦略爆撃調査団の文書などによって明らかにする。

キーワード：神戸経済の重工業化，工場の分散・疎開，学校工場，空襲被害，勤労動員体験

はじめに～小松左京の戦争体験

1931年生まれの小松左京は，兵庫県立神戸第一中学校の生徒で勤労動員された世代である。小松の作品には勤労動員や空襲体験など戦争体験が濃厚に反映された作品が多くある。『地には平和を』（1963年初出）は，８月15日，鈴木貫太郎総理大臣や木戸幸一内大臣らが殺害され阿南惟幾陸軍大臣が総理大臣となって玉音放送は中止，戦争が継続され本土決戦が行われるという SF である。『召集令状』（1964年初出）は，平和を謳歌している時代に「徴集のチの字も知らない」若者たちに突然召集令状が届き，令状に記載された日に召集された若者は消えてしまう。社会は恐慌状態に陥るという話だ。『戦争はなかった』（1968年初出）は，日本人から日米戦争の記憶が消されてしまう。戦争が本当にあったのか，戦争があったと主張する主人公は狂人とみなされる。「みんなきいてくれ，戦争は本当にあったんだ。―思い出してくれ，きいてくれ」主人公は絶叫する。『物体 O』（1964年初出）は突如高さ数十キロメートルの正体不明の物体によって日本列島は分断される。外部と遮断された列島は自給自足を余儀なくされ，資材の割り当てや食料の配給，生産と消費の統制など計画経済が行われる。戦時下の高度の統制経済を彷彿とさせる作品だ。

『くだんのはは』（1968年初出）は怪異小説である。空襲で焼け出された中学生の主人公は，以前に主人公の家のお手伝いさんだった人の世話で芦屋の大きな屋敷に住むことになる。その屋敷は戦時下とは思えないほど静かで食料等も不自由していない。しかし女主人から覗いてはならない部屋があるといわれる。夜な夜な泣き声が聞こえてくるその部屋には何がいるのか。内田百閒の名作

『くだん』では，くだんは顔は人間，体は牛であった。小松は内田百閒の作品を踏まえるとともに，戦死した若者の母である「九段の母」をイメージしているのだろうか。小松は「くだん」によって何を象徴したかったのだろうか，と思わせる作品である。

勤労動員を扱った作品には『最初の悔恨』(1955年初出)，『廃墟の彼方』（1968年初出）がある。『最初の悔恨』は，勤労動員された小説の語り手は同じ工場に動員された少女にほのかに思いを寄せるが，上級生からその少女への手紙を託される。少女と通勤電車が同じ主人公は意に反して二人の恋の仲介役を担わせられるのだ。そして上級生，少女ともに空襲で死んでしまう。少女に自分の思いを告白できず，悔恨を覚えるという筋書きだ。

『廃墟の彼方』は，空襲，敗戦後主人公は同じ中学校の友人と焼け跡を歩き回る。二人とも闇市の持つ脂ぎったエネルギー，猥雑さには何かしらそぐわないものを感じる。あるとき友人は廃墟の彼方に忽然と消えてしまう。「廃墟こそが，唯一絶対の実在であり，さまざまな人間の営みとその繁栄―高速道路や，高層ビルや，繁華街の喧騒，無数の乗物や男女の歓楽といったものこそ，この絶対的な廃墟の上にうつろい行く，一片の蜃気楼なのかも知れない。」(1)

1960年代，日本の高度成長のさなかに小松左京はなぜこのような作品群を書いたのか。これらの小松の作品の根底には自身の勤労動員，中学校生活，空襲の体験があるし，それを作品化して残したかったのであろう。それだけ強烈な体験であったに違いない。

神戸―中の勤労動員については，小松以外の生徒の回想もあるが，小松は川崎重工業の旋盤工場で働いていた。『小松左京自伝』によると，「電車は動いたり動かなかったりで，不通の日には延々と三時間も歩いて通わなければならない。…やせこけ，疲労と空腹でとげとげしい目つきの，汚らしい少年の群れがとぼとぼと工場に向かうのだ。」「工場で働いているさなか，緊急退避の命令が出て，山の中腹に慌てて逃れる。戻ると，工場の一部が瓦礫の塊になり，熱と煙を吐き出していた。」８月15日の玉音放送を聞き違えて「聖戦完遂だ」と言って生徒を殴る教師がいるなど空襲と敗戦の中のすさんだ情景が浮かんでくる。(2)

神戸の勤労動員はどのようなものだったのか，その実態に少しでも迫りたいと思う。勤労動員については，学徒を動員する国・軍部や企業，動員される学校・生徒側の事情を総合的な観点からみてみる必要がある。生徒がどのような作業に従事したのか，どのような思いを持っていたのか，勤労動員は生産に有効であったのか，空襲や労働災害による被害はどうだったのかなど解明すべきことは多い。しかし企業側，学校側の資料が共に乏しく十分な分析は困難である。残された資料から神戸の勤労動員とは何であったかを広い視野から考えることにする。

1　神戸経済の重工業化と工場の分散

（1）神戸経済の動向

日本経済は1932年（昭和７）頃から世界恐慌からの回復軌道をたどり始めるとともに，重化学工業化が進展する。1935年以後は軍需が新たな産業の発展を促すことになる。さらに1937年の日中戦争から戦争遂行のために重化学工業化が促進された。

神戸経済の動きをみてみよう。神戸市産業研究所編『神戸市産業統計要覧』は1939年に刊行されたものだが，その時点までの神戸経済の変化を次のように述べている。「重工業の異常なる躍進は言ふ迄もなく軍需並びに生産力拡充に照応するものであるが，本市工業は夙に重工業を中心として形成され発展し来た」ため（日本経済の）「再編成過程に於いてはその積極的影響を受けること最も顕著」であり，神戸市の「総工産額」のうち重工業の占める割合は1937年度62.2%（前年度55.9%）に達し，ことに金属工業は驚異的な増加率を示した。「重工業への偏奇化」の傾向をますます大きくしているのである。

労働の側面からみると，重工業部門の労働者数

の増加は当然であるが，化学工業はゴム工業を中心としているため全国的傾向とは逆に減少を示した。紡績工業も著しい減少を示している。一般的な傾向として「軍需産業・殷賑産業と平和産業・犠牲産業との跛行性は本市に於いても亦端的に表れている。」しかし重工業部門においても，まして全体として労働者増加のテンポは全国平均増加率をはるかに下回っている。

表１は神戸市の工業の生産額，従業員数の推移を示したものであるが，上の記述を裏付けている。金属工業，機械器具工業が躍進し，反対に紡績工業，化学工業は神戸市の工業における地位が低下してきている。対米戦争中の神戸市のデータは収集が困難であるが，金属，機械器具工業が大きく躍進する一方，紡績工業などは大きく低下したものとみられる。(3)

表２は六大都市の主要工場生産額の推移である。1936年から1938年の３か年の工業生産額の増加率では，東京市，名古屋市，横浜市が大きく，次いで大阪市で神戸市と京都市は他都市に比べ低い。名古屋市と横浜市は３年間で大きく伸びた。この２市に比較すると神戸市は成長率が低い。神戸市の特徴は，金属工業の比率が六大都市でもっとも高く，また金属工業と機械器具工業の合計も大きいことであり，この２つが1938年には72.5%にも達している。化学工業は1938年に10.2%でウエイトが低い。化学工業のウエイトが高いのは横浜市である。

個別企業の動きをみてみよう。神戸製鋼所は神戸市を代表する金属，機械の企業である。神戸製鋼所は戦時下において工場を盛んに増設していく。表３は神戸製鋼所の各工場の操業開始年次，生産品目を示した。政府・軍部からの増産要求に対応するものであり，また防空の観点から地方に工場を分散していった過程が分かる。神戸市の金属，機械工業は神戸市の周辺や地方に工場を拡張していったのである。1943年から45年に地方での工場の開設が相次いでいる。なお神戸製鋼所の本社工場は東海岸地区，西海岸地区，山手地区の３つに区分されている。(4)

同じく神戸を代表する川崎重工業の場合，造船（商船や艦船），車両，航空機，鉄鋼部門などを事業内容としていた。車両部門を1928年に分離独立させ川崎車輛株式会社を設立した。1937年には航空機部門を分離して川崎航空機株式会社を発足させた。鉄鋼部門の分離は戦後の1950年に行われた（川崎製鉄）。鉄鋼部門の工場は，神戸製鋼所の西海岸地区に隣接していた。なお1938年に社名をそれまでの川崎造船所から川崎重工業に変更したのであるが，それは造船所では会社の事業内容を正しく表していないためであった。(5)

川崎航空機の場合，発動機部門は神戸市内にあり，機体工場は各務原（岐阜県）にあったが，神戸工場は「敷地及規模頗ル狭隘ヲ感シ居ル所拡張ノ余地ナク，各務原ノ機体工場モ亦陸軍ノ関係ニテ拡張ノ余地ナキヲ以テ新ニ土地ヲ求メ発動機工

表１　神戸の主要工業の推移（1931～1937）

	紡績工業		金属工業		機械器具工業		化学工業		工業合計	
	従業員数	生産額	従業員数	生産額	従業員数	生産額	従業員数	生産額	従業員数	工産額
1931		15,382		50,609		45,612		40,798		225,508
1932	5,358	15,438	6,999	53,626	19,755	54,560	13,553	46,030	55,155	245,292
1933	7,023	21,899	10,615	85,636	33,703	76,857	10,208	51,345	75,924	317,743
1934		23,121		113,717		93,066		56,802		367,379
1935		27,843		114,874		105,723		71,299		414,421
1936	7,392	28,007		125,272		146,786		81,663	79,624	486,504
1937	8,491	33,741	11,878	212,434	41,935	187,044	9,146	99,026	86,387	640,731

出典：工産額1931～1937は『神戸市産業統計要覧』による。従業員数は1937年は『神戸市産業統計要覧』，その他は『神戸市統計書』による。

表 2　六大都市主要工場生産額趨勢（1936～1938）

（単位：円, %）

都　市	年　次	工業生産総額	紡績工業	食料品工業	金属工業	機械器具工業	化学工業
東 京 市	1936	1,719,510	9.9	9.2	19.3	26.3	21.4
	1937	2,404,618	8.0	7.2	22.3	29.6	19.5
	1938	3,194,901	5.8	6.6	22.2	35.4	18.5
大 阪 市	1936	1,479,135	12.3	4.4	29.9	14.4	16.7
	1937	2,154,315	9.9	3.8	35.7	22.8	15.0
	1938	2,541,680	7.4	3.5	37.7	24.3	15.7
名古屋市	1936	466,778	35.3	9.7	3.8	23.5	5.4
	1937	614,744	31.6	8.0	5.4	26.3	7.9
	1938	863,387	19.6	7.4	8.8	41.2	7.6
京 都 市	1936	203,402	43.3	17.0	7.7	12.8	7.2
	1937	233,066	39.0	14.6	10.1	16.3	9.9
	1938	316,091	32.0	12.0	11.8	17.5	15.5
神 戸 市	1936	486,504	5.8	13.5	25.7	30.2	16.8
	1937	641,100	5.2	10.0	33.7	29.6	15.3
	1938	763,073	2.3	9.2	43.3	29.2	10.2
横 浜 市	1936	448,831	3.3	10.6	15.3	36.5	23.3
	1937	689,142	2.6	8.7	16.2	35.8	25.8
	1938	836,612	2.9	7.4	19.9	39.0	24.3

出典：東京市政調査会編『日本都市年鑑　10』（1941年）456頁。

表 3　神戸製鋼所の工場

工場名	操業年	製　品　名	戦災比率（%）	従業員数	備　考
本 社 工 場	1905	鋼材・諸機械　車輛部品	27	3,446(11,862)	神戸市
門 司 工 場	1917	鋼合金製品　軽合金展伸材		313(3,303)	福岡県門司市
鳥 羽 工 場	1921	電気機械		1,406(5,863)	三重県鳥羽町
名古屋工場	1937	鋼品　軽合金鋳鍛造品	47	420(5,289)	名古屋市
長 府 工 場	1939	軽合金展伸材		1,013(8,247)	下関市
山 田 工 場	1941	電気機械	62	727(3,339)	宇治山田市
大久保工場	1942	切削工具　機械並部品		362(1,969)	兵庫県大久保町
尼 崎 工 場	1943	鉄鋼二次製品		384(　937)	尼崎市
東 京 工 場	1945	電気機械		242(　197)	東京都日野町
日 高 工 場	1943	鉄鋼二次製品		63(　332)	兵庫県日高町
松 阪 工 場	1944	電気機械		348(1,297)	三重県松坂市
能 登 工 場	1944	鉄鋼二次製品		128(　218)	石川県羽咋郡
高 知 工 場	1945	銑鉄	92	81(　137)	高知市
中 津 工 場	1943	軽合金展伸材		96(3,403)	大分県中津市。昭和20年廃止
玉 島 工 場	1944	内燃機関		33(1,073)	岡山県玉島町。昭和20年廃止
赤 穂 工 場	1944	金属		33(　827)	兵庫県赤穂町。昭和20年廃止
小 倉 工 場	1944	軽合金鋳物		－349	福岡県小倉市

出典：「持株会社整理委員会等文書　神戸製鋼所関係書類其の一」（アジア歴史資料センター）

場ヲ移転シ且ツ機体工場ヲ建設セン」として，1938年兵庫県明石郡大久保村に約50万坪の土地を取得し新工場を建設しようとしたのである。(6)

川西航空機は神戸市の川西機械製作所から飛行機部門を分離し1928年に設立され，兵庫県武庫郡鳴尾村に工場を建設（1930年に完成）した。さらに武庫郡本庄村に甲南製作所（1941年建物の建築開始），武庫郡良元村に宝塚製作所（1940年建築開始）などを建設，操業を開始していった。(7)

三菱造船所は1934年三菱航空機を合併し三菱重工業に社名を変更した。神戸造船所は大型船の建造に備えて第２船台，第３船台を18メートル延長した。42年には第５船台を築造して潜水艦建造の増強が図られた。大型船や大型戦艦の入渠施設の確保のために，1938年から乾ドックの建設に着手した。このドックの完成は戦後の1946年８月であった。(8)

次に三菱電機の場合をみておこう。三菱電機は三菱造船所を母体に1921年に設立され，主力工場は神戸工場であった。第一次世界大戦後，神戸製作所，長崎製作所，名古屋製作所の３製作所体制が作られた。世界恐慌後の1932年ころから飛躍的発展を遂げ，1940年に無線機，弱電部門に進出するため大阪工場（1944年伊丹製作所と改称）を新設した。神戸製作所が担っていた本店研究部や電鉄用電気品等の業務が移転された。さらに1943年から44年にかけて福山工場，中津川工場，郡山工場，和歌山工場，姫路工場，福岡工場が設置された。三菱電機の場合も，神戸に最初の生産拠点や研究開発機能があったが，業容の拡張によって，伊丹のような近隣や地方に工場が分散されることになったのである。戦略爆撃調査団の調査によると，軍の発注は1938年以降次第に他の種類の活動を蚕食し，1941年には公共施設や産業用の需要は完全に衰退し生産の80％は軍の用途に向けられたのであった。(9)

工場疎開については，「帝都及重要都市ニ於ケル工場家屋等ノ疎開及ビ人員ノ地方転出ニ関スル件」が1943年10月に閣議決定され，続いて同年12月に「都市疎開実施要綱」が策定され京浜，阪神（大阪市，神戸市，尼崎市），名古屋，北九州が疎開区域とされた。会社，工場等は「整理統合又ハ地方移転等ノ計画ヲ樹立実施ス」とされた。

政府は産業立地及び人口配置の適正を期するため1940年９月に国土計画要綱を決定し，さらに1942年６月に工業規制地域及び工業規制地域に関する暫定措置を決定した。人口が過度に集中している４大工業地帯には一部の例外を除き工場の新設を認めないことになった。国土計画の策定・運用の障害を除去するとともに，防空上の悪影響を考慮したのである。神戸市等における工場の立地は制限を受けることとなるのである。（昭和17年度『産業年鑑』）「支那事変が始まつてから軍需工業の飛躍的な発展等のため人口の都市集中が急速に行われ，過大都市の弊害が顕著に現れ始めたると殊に空襲に対して都市防衛を完からしむるための重要施設分散の必要が痛感されるに至る等により，地方計画・国土計画の樹立は高度に要請されるに至つた」のである。(10)

神戸製鋼所や三菱電機等が工場を地方都市に新設したのは，このような工場疎開，防空，国土計画・地方計画等を踏まえた動きだったが，これらの企業の中心的な工場は大都市区域に存在し，それが空襲の標的となったのである。

（２）戦争末期の工場の疎開

工場の疎開は工場立地を計画して疎開を実施し設備増強を兼ねた疎開と戦争末期の応急的で泥縄式の疎開とに区別して考えた方がよいであろう。計画的な疎開・分散は前述したのでここでは戦争末期の状況をみることにする。

三菱重工業神戸造船所は，1944年10月から工場及び資材の疎開を開始した。工場は兵庫県朝来郡生野町，三越百貨店地下など19か所に分散させ機械546台を移転した。資材は明石郡の江井ヶ嶋酒造など６か所に疎開した。事務所も学校など17か所に疎開した。(11)

三菱電機伊丹製作所の神武玄武工場出石分工場のように1945年８月13日に完成したものや和歌山工場の一部を高野山麓に疎開させる際に機械を牛

車に積んで運搬するような有様であった。敗戦間際には，管理部門の疎開を余儀なくされた。神戸製作所では，勤労課は室内国民学校，経理部と兵器設計部は板宿青年学校，購買課は明親国民学校に疎開して空襲を避けたのであった。なお45年３月以降，防諜の観点から軍の命令によってすべての製作所・工場に秘匿工場名が使用された。神戸製作所は神武遠矢製作所，伊丹製作所は神武稲野製作所，姫路工場は神武千代田工場という名称が使われた。(12)

三菱電機の疎開については戦略爆撃調査団による詳しい分析がある。会社は，工場疎開を優先的に実施した。1944年半ばに学校において生徒を使用する決定がなされた。15の生産単位が工場から取り除かれ神戸市内や近傍に移転された。都市の混乱から生じる大きな困難や工場の重大な被害にもかかわらず，疎開計画の大半は降伏以前に実施された。４つの事務所，設計部門，８つの生産単位，２つの訓練場が工場から１～３マイルに移転した。学校に移転した部門は1945年の１月以前は十分機能していた。空襲による再調整はあったが学校工場の計画は1945年７月には完全に達成された。野心的な２か所の地下工場化は戦争が終わったときには完成していなかったが，600～1,000人の成人労働者を使用する計画だった。終戦時には，疎開工場は1,960人の生徒，890人の成人の工場労働者，550人の設計部門と事務部門の従業員を擁していた。計画では4,930人を疎開工場に配置する予定であり，９月までには完了する見込みだった。(13)

国鉄では工場が戦災を被った場合，疎開職場で車両を修繕できるように工場疎開を行った。鷹取工場でも，機関車修繕作業の一部を加茂（京都府相楽郡加茂町）に，客車修繕作業の一部を和田山に，貨車と自動車修繕作業の一部を加古川（兵庫県加古郡加古川町）に疎開させた。(14)

2　勤労動員の展開と戦災

太平洋戦争下の労働力は，1940年10月～1944年２月の間に，日本全体で男子有業者は128万人減少し女子有業者は50万人増加した。鉱業・製造業・運輸通信部門は173万人増加，商業は248万人の減少であった。1944年２月～同年11月では，有業者は全体として263万人の減少，女子有業者は66万人の増加であった。全体としてみると，膨大な兵員を調達するために男子有業者を徴集し，その穴埋めに商業部門からの転業者や学徒・女子労働力を動員することになったのである。こうした労働力政策により有業者の内訳では商業部門は大幅に減少し，製造業や運輸通信部門に労働力が集結されたのである。学徒の勤労動員はこうした背景のもとに実施されたのであった。しかし企業の熟練労働者を徴兵しその穴埋めに非熟練労働者や学徒・女子労働力を配置して生産効率があがるはずもなかった。戦後になってアメリカ側はこうした労働力政策について口を極めて非難している。(15)

神戸の工場労働力に関する戦略爆撃調査団による分析では，空襲前の1945年１月の15万人の工場労働者のうち造船業が57,000人，鉄鋼業24,000人，航空機部品22,000人，兵器等18,000人，その他は34,000人（うち化学工業10,000人）であった。そして三菱神戸造船所，川崎重工業の造船工場，神戸製鋼所，三菱電機，川崎重工業の鉄鋼部門の５大工場に80,000人，55％が雇用されていた。さらに次に規模の大きい５工場を含めると上位10工場は125,000人，80％を占めていた。この調査の基礎となる数値は警察が提供した賃金台帳によるもので，どの範囲の労働者を含んでいるのかはっきりしないが，神戸の特徴を表しているといえる。すなわち重工業が圧倒的なウエイトを占めていること，大規模な工場に生産と労働力が集中していることである。(16)

表４は1945年11月14日に神戸製鋼所が戦略爆撃調査団に提出した書類の一部である。1943年から1945年８月までの期間で最大の従業員数を示しているのは1943年の17,748人である。事務員と技術者はさほど増減がないので全体に影響を及ぼしているのは労務者数の動向であった。職工は1943年の10,574人から1944年にかけて次第に減少した。

表４　神戸製鋼所の労務状況

		1943	1944				1945							
			第１四半期	第２四半期	第３四半期	第４四半期	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月
事務員（A）		1,729	2,082	2,105	2,177	2,223	2,225	2,224	2,221	2,182	2,027	2,952	2,237	2,091
技術者（B）		666	719	737	747	713	716	711	711	690	689	662	633	633
労務者	養成工（C）	3,536	3,051	3,027	2,993	2,963	1,841	1,826	1,803	1,782	1,762	1,737	1,652	1,621
	動員学徒（D）		200	763	890	2,020	2,134	2,075	1,851	1,268	1,142	1,142	1,142	1,142
	職　工（E）	10,574	9,998	8,925	8,226	7,756	9,103	8,756	8,528	8,248	7,815	7,730	7,402	7,238
	その他（F）	1,243	1,250	1,253	1,203	1,127	1,150	1,200	1,030	970	1,010	650	570	440
	小計（C～F）	15,353	14,499	13,968	13,312	14,046	14,228	13,857	13,212	12,268	11,729	11,259	10,766	10,911
合計（A～F）		17,748	17,300	16,810	16,236	16,982	17,169	16,792	16,144	15,140	12,077	11,617	13,636	13,115
合計のうち男		16,182	15,142	14,537	13,582	14,234	14,419	14,043	13,410	12,599	12,599	13,973	11,182	10,600
合計のうち女		1,566	2,158	2,273	2,654	2,748	2,750	2,749	2,734	2,541	2,359	2,356	2,454	2,565

出典：Kobe Seikosho: Report No.39y(2)（USSBS 文書）。
注）明らかな不突合は訂正した。1944年第４四半期の労務者小計は不突合。

1945年１月にやや回復するが，その後８月まで減少する。自社で工員を養成していた養成工は1945年に入ると大幅に減少している。養成工を確保できない状況になっていたのであろう。動員学生は1944年の第１四半期の200人から始まっているが，45年１月の2,134人が最大の動員数になり，以後減少する。1945年１月に動員学生の労務者全体に占める割合は15.0％で最大になる。労務者数は労務者の徴兵や神戸市や周辺都市への空襲の影響が大きいのであろう。神戸製鋼所自体は1945年６月の空襲で被災したが，労務者はそれ以前から都市爆撃で住居を喪失するなどの影響を被ったのであろう。なお神戸製鋼所全体の従業員数は終戦時に職員11,528人，「工員又ハ之ニ準スルモノ」は男子28,972人，女子10,933人で合計51,433人であった。[17]

表５は川崎航空機明石機体工場の労務状況である。川崎航空機全社の最大の雇用は1944年７月の

表５　川崎航空機明石機体工場の労務状況

		1944											
	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
労務者	男子	13,786	11,845	11,800	12,182	11,794	12,232	13,535	12,664	13,121	12,627	12,384	11,160
	女子	567	608	602	992	998	975	972	968	957	952	976	958
生　徒	男子				65	329	614	1,387	1,387	1,623	1,623	2,127	2,127
	女子					816	1,044	1,398	2,007	2,007	2,209	2,446	2,446
合　計		14,353	12,453	13,239	13,239	13,932	14,865	17,292	17,026	17,708	17,411	17,933	16,691

		1945							
	月	1	2	3	4	5	6	7	8
労務者	男子	10,096	9,726	9,554	9,508	9,251	9,181	9,124	9,121
	女子	941	936	924	920	901	889	868	850
生　徒	男子	2,127	2,127	2,127	2,276	2,351	2,354	647	642
	女子	2,446	2,446	2,446	2,498	2,498	2,498	1,844	1,844
合　計		15,610	15,235	15,051	15,202	15,012	14,922	12,483	12,457

出典：Answers to USSBS questionaire Report No.19c(5)

87,121人で，機体工場は64,494人，エンジン工場は22,627人であった。この時点で機体工場の19%，エンジン工場の７%が学徒動員の生徒であった。明石機体工場では雇用がピークに達するのは1944年の下半期であり，同年12月から低下し始め45年８月にもっとも少ない人数になる。動員の生徒数が初めて記載されるのは1944年４月の65人であり，学徒動員が本格化したため動員数が急速に増え，44年末には4,500人程度になる。45年１月以降明石工場の総雇用量は減少に転じるが学徒の動員数は７月まで変わっておらず，４～６月はむしろ増加した。このため雇用量全体に占める学徒の割合は44年末は20～27%であったものが45年には30%を超えるようになる。７月からは学徒数も減少する。明石工場や都市への空襲の影響もあったものとみられる。[18]

三菱重工業神戸造船所の従業員数は1937年末に約9,400人であったが，終戦時には徴用工，学徒動員，女子挺身隊などを含め約32,000人にも達した。[19]

川崎重工業に対する戦略爆撃調査団による尋問によると，神戸の造船所では戦争捕虜500人，朝鮮人4,000人（うち女子300人），徴用工8,000人，職工8,000人，学徒2,000人（うち女子100人）が使用されていた。[20]

三菱電機では学徒動員や女子挺身隊等は概数で全社で23,160人に達した（時期は不明）。このうち兵庫県関係は，神戸製作所3,300人，伊丹製作所8,300人，姫路工場660人となっている。伊丹と神戸は三菱電機の中でも多数の学徒が動員されている。[21]

国鉄鷹取工場の学徒動員は学校名が判明している。1944年６月に動員されたのは，神戸市立第一高等女学校222人，滝川中学178人，その他県内の中学校，高等女学校64人など合計499人であった。1944年度末の学徒動員調によると，滝川中学160人，神戸市立第一高等女学校207人，山手高等女学校60人，親和高等女学校97人，神戸市若松国民学校286人，南須磨国民学校80人など合計914人であった。45年度には兵庫県立神戸第四中学校180人が新たに動員された。なお神戸市の国民学校高等科の動員状況は資料が不足しており，鷹取工場の記録は貴重である。[22]

次に企業の戦災による被災率を見ておこう。被災率をどのように計算したのか問題であるが企業側が掲げる被災率を示そう。まず終戦直後に戦略爆撃調査団による尋問の内容を掲げておこう。三菱重工業神戸造船所のプラントの被災率は20%。三菱電機神戸製作所はプラント40%，工作機械10%（うち修理不能２%）。三菱電機伊丹製作所は空襲被害がなかった。工場から数マイル離れた寄宿舎が焼失したのみであった。

神戸製鋼所本社工場は27%であった（表３）。国鉄鷹取工場は，建築物で建物全焼36%，半焼22%の被害を受け，設備機械は工作機械28%，板金用機械42%，鋳物用機械17%，木工用機械54%などの被害を受けた。[23]

3　兵庫県下の学徒勤労動員

労働需給が逼迫するにしたがって学徒は「労務給源」として急速に注目を浴びることになった。学徒を作業に従事させる業務の拡大，勤労動員期間の延長と就学期間の短縮，動員対象の拡大，深夜業への従事，勤労管理の徹底などが行われていく。勤労動員の理由付けは，1943年10月の「教育ニ関スル戦時非常措置方策」での「教育実践ノ一環トシテ」実施されるという考えから，44年１月「緊急学徒勤労動員方策」及び同年３月「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」では「勤労即教育」という考えになり，学徒は教育に従事するという側面が軽視，あるいは無視されるに至る。この「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」は学徒の通年動員，教職員の率先指導と教職員による勤労管理を定めていた。そして学徒の深夜業従事が認められた。同年４月の「学徒勤労動員実施要領ニ関スル件」では勤労動員を「行学一体ノ道場」としている。そして７月の「学徒勤労動員ノ徹底強化ニ関スル通牒」では，１週６時間の教育訓練時間の停止，国民学校高等科の生徒の継続

動員，中学校低学年の動員等も定められた。8月の国家総動員法に基づく「学徒勤労令」によって先行した行政措置の法的な裏付けが行われた。こうして「学生服の労務者」（『学制八十年史』）ともいうべき状況が出現し，工場へ動員が広範に実施されていくのである。[24]

兵庫県では44年4月に県知事を本部長とする「兵庫県勤労動員本部」が設置された。5月31日に神戸市民運動場で兵庫県学徒動員壮行会が挙行され，学徒の本格的工場動員が開始された。

兵庫県における44年10月20日現在の動員状況は，中等学校男子59校，中等学校女子73校，国民学校男子校134校，女子校143校など合計427校，動員学徒数は中等学校男子30,752人，女子26,867人，計56,619人，国民学校男子14,918人，女子12,177人，計27,095人など合計85,608人であった。兵庫県下の工場の需要に応じるためには兵庫県下の学校だけでは対応できないので他府県（京都府・大阪府・和歌山県・四国4県・岡山県）の学徒も動員された。44年4月から10月までの7か月間で10名が命を失い，傷害事故50件，疾病等726件の労働災害が発生した。

学校工場は軍需工場の分散疎開の必要から1944年4月に「決戦非常措置要綱ニ基ク学校工場化実施要綱」が決定され，それを受けて兵庫県では同年12月5日に各学校長，市町村長等宛て通牒「学校校舎転用ニ関スル件」を発した。「校舎ノ転用ハ他ニ利用ス得ベキ適当ナ建物ナキ場合トシ，苟モ濫ニ陥ラサル様留意スル」など必要最小限度にとどめようとした。1945年4月現在の県下学校の転用状況は中等学校は122校で転用率86%，国民学校は167校で転用率25%であった。用途別の内訳は，工場25%，倉庫31%，事務所7%，その他21%であった。

1963年刊行の『兵庫県教育史』は「兵庫県学徒工場動員出動状況」及び「県下校舎転用学校数」の表を掲げるなどしているが，残念ながら勤労動員の具体的な状況について十分なページを割いていない。このためどの学校がどこに動員されたか，あるいはどの学校の校舎がどの企業に転用されたかは分からない。[25]

1964年刊行の『神戸市教育史　第二集』は神戸市内の中等学校の勤労動員状況について，勤労動員先企業，動員学徒（学年，人数），動員期間を表にまとめている。しかしながら国民学校高等科の児童も動員されたのに記載は不十分である。教育史編集の時にすでに国民学校の動員状況はわからなくなっていたのであろうか。

神戸市教育史が掲げる企業をみると，川崎重工業，日本発動機，三菱神戸造船所，三菱電機神戸製作所，三菱重工業，三木飛行機，川崎航空機（明石），土井正機械，石原造船所，三菱精機工作所，播磨造船所，日本パイプ，内外ゴム，湊川鉄工所，川崎機械，小泉製麻，東洋ベアリング，川西機械製作所，阪神内燃機，中部港都局，国鉄鷹取工機部，甲南電化，日本無線，田中鉄工所，神戸鉄工所，川崎車輛，東洋航空，住友金属，川西航空，川西真空管，神戸ダンロップ，兵庫電話局，神戸中央電話局，鐘ケ淵工業造機工場，大丸工廠，神戸製鋼所，エアブレーキ，三菱電機伊丹製作所，掘抜帽子，阪神内燃機，山陽電鉄，国鉄鷹取工場，帝国精密，日本通運，菊正宗酒造，桜正宗酒造，神戸市港湾局，花月工場（宝塚），住友プロペラ尼崎工場，千代田光学武庫川西宮工場，日東航空工場，東亜パルプ工場，日本軽合金工場，城戸口軽合金工場，日本セルロイド工場，東亜パルプ工場，三菱軽合金工場，六甲造機工場，住友鋼管，兵庫県庁報国隊，兵庫区役所などがあげられている。軍需工場や運輸だけでなく，酒造，紡績の工場，兵庫県庁，区役所，電話局，神戸市港湾局などにも動員されている。ただこの資料は，川崎重工業といってもどの工場なのか明らかでなく，艦船工場なのか製鈑工場なのか分からない。さらに戦争中の工場名については防諜の関係もあって名称や場所等も明らかでない場合もある。学校史や社史等でどの工場に動員されたかを明らかにしていく必要があるであろう。

次に『神戸市教育史　第二集』によって学校工場化をみると，学校名，使用した工場名，使用設備・作業内容，期間をまとめた表を作成している。

この表では14の学校が掲載されているだけであり，必ずしもすべてを網羅しているとはいいがたいのでなかろうか。例えば三菱電機の社史によれば県立第一高等女学校，県立第二，第三中学校，親和高等女学校があげられているが，『神戸市教育史』は県立第一高等女学校だけが記載されている。かなりの脱漏があると考えられる。学校工場化についても，学校史や社史等によって補充することが必要であろう。(26)

4　勤労動員の諸相

三菱電機の社史は勤労動員の光景を次のように叙述している。「朝まだき，学校ごとに整列し「ああ紅の血は燃ゆる」（学徒動員の歌）を合唱しながら，報国隊旗を先頭にゲートルに学帽，モンペに鉢巻で入場する光景には純粋な感動があった。」とし伊丹製作所の行進の写真を掲載している。勤労動員の一つの光景はおそらくこのようなものであったのであろう。勤労動員の歌とされる「ああ紅の血は燃ゆる」の２番の歌詞は「後につづけと兄の声/今こそ筆をなげうちて/勝利ゆるがぬ生産に/勇み立ちたる兵（つわもの）ぞ/ああ紅の血は燃ゆる」と勤労動員の意義を説き鼓舞しているのである。1944年12月にレコードになったが，この曲を歌った安西愛子らは「悲しい，美しい曲だった」と回想している。歌詞の鼓舞にもかかわらず，勤労動員の実態を語るものといえよう。(27)

ここでは勤労動員の様相を学校史によってみていこう。

（１）兵庫県立神戸第三中学校

1944年，神戸第三中学校は５月22日から１週間美嚢郡別所村の飛行場建設に全校生徒が動員された。３・４年は三菱電機に６月22日から動員。５年生は三菱造船所に動員される。ある生徒の回想を紹介しよう。動員されたのは第三機械工場の小物工場に６クラスに分けて配属された。工場の前のグラウンドに集まって朝礼があり体操をしてから配置についた。工具工場でハンマーやタガネを持たされ旋盤を使ったりした。作業工程の末端の仕事で何を作っているのか分からなかった。仕事に慣れてくると養成工より，三中生に仕事を任せるようになってきた。養成工より過重な仕事を割り振られたときには，付添教員が工場の伍長連中に「差別するな」と食いついて怒ってくれた。昼飯は握り飯から豆カスになり，真っ黒なコーリャンになった。２月４日の空襲では，三菱電機は直撃されなかったが，真光寺の前の防空壕に逃げ込んだ。

ある付添教員は次のように回想している。三菱電機での最初の仕事は練習でヤスリかけなどをやったが，すぐに旋盤やシェイパーなどの難しい機械を使うようになった。生徒は純真でまじめに一生懸命やるので案外工員よりもよくやるようになった。毎日生徒と一緒に暮らして，しかも生死をともにしていたので強くつながっている感じがする。３月17日の空襲では神戸第三中学校は校舎や雨天体操場が焼失した。三菱電機の工場は一部被害があったが，ほとんど無事で終戦までいた。６月５日の空襲では真光寺の防空壕へ一応行ったが，その日はどうも危ない気がして別の方面に生徒を帰した。それがよかった。真光寺あたりは空襲でもう無茶苦茶になった。

44年９月，学校に三菱電機の工場が設置された。３・４年生の一部が三菱電機から引き揚げ，高射砲照準器の製造，戦車のエンジン始動用モーター，航空機用発電機の組み立てを行った。旋盤で５指切断の事故が発生した。学校工場は終戦まで続いたが，材料も入ってこない状態であった。昼食は三菱電機が準備した。学校工場へは三菱電機の社員がきて指導に当たっていた。三菱電機の社史によると，会社は工作部に学校工場課を設け生産と作業指導を行った。生徒たちは午前７時20分から８時まで授業をうけ，８時５分から終日作業を行ったという。

45年３月に５年生及び４年生が同時に卒業した。４年生は就学期間の短縮で卒業したのである。新３年が４月21日に三菱電機に入所式。８日間～11日間の教育訓練が計画されたが，計画どおりには

いかなかったようである。教育訓練後，動員再開までに焼け跡作業に動員されたりしている。6月25日から本格的動員になったが父兄会では「危険なところにつれていくことは大きな心配である。身体的環境も悪い。一番心配なのは，学業による修養ができぬ。仕事がいつもはないゆえ怠けぐせがつく等々。」と学校側は説明している。会社側も空襲対策や疎開，材料の手当等に忙殺され，生徒を有効に活用できない状態であったのであろうか。[28]

（2）神戸市立第一神港商業学校

男子商業学校は工業学校等に転換するという政府の方針にしたがって，1944年度から工業学校に転換し，電気科及び電気通信科を置くことになった。学校名は神戸市立第一電気工業となった。学徒動員の受入れ工場について，44年3月から4月にかけて調査，交渉が行われ次のような割り当てが決定された。

①川西航空機大久保工場へ2年生全員を派遣
②川西航空機鳴尾工場に3年生全員を派遣
③住友金属プロペラ尼崎工場へ4年生全員を派遣
④東洋工業本山工場へ5年生の一部を派遣
⑤身体上の都合で残留する生徒のうちから農耕班を組織し，鈴蘭台，八多等の農場に派遣

4月14日に兵庫県主催の学徒動員壮行式が東遊園地で開催され，4月に各工場に派遣が開始された。さらに6月になってから5年生の一部が三菱重工業神戸造船所に派遣された。各工場には教員が付き添い，生徒の監督，指導，学校との連絡に当たった。残業，深夜業も行われた。作業そのものは軽易な単純作業だったようである。

動員が長期化するとともに，次第に風紀が乱れ，工員の悪習に習う者が出てきたり，無断欠席，長期欠席もあったりした。学校側は父兄を呼び出したり，自宅を訪問するなどした。大多数の生徒はまじめに出席し忠実に作業に従事した。

東洋工業本山工場は20年5月11日，川西航空機鳴尾工場は6月9日，住友金属尼崎工場は6月15日にそれぞれ空襲を受け壊滅的な損害を被った。空襲で生徒の負傷はあったが死者はなかった。相次ぐ空襲の中で教員も生徒も疲弊し士気があがらず「怠けねば損だ」という風潮が蔓延した。「校務日誌」は次のように記している。45年2月20日「昨今の敵機頻襲に睡眠不足のために生徒の士気あがらず。依って，「敵も睡らないでやってくる然らば当方も睡らず迎へよう，頑張り合ひだ，負けてたまるか。」と生徒に訓示をなす。士気ややあがる。」5月10日「「本部，分遣隊を通じて最近怠けねば損だという風潮濃厚なり，一人以て国を興すの気概は十二分に有するも見えすきたる現状，皇国の前途も思ひやられてうたた寂寥に堪へず。」6月7日「各工場付添教員は無断欠勤多く，本部職員は釣合上困却する。6月10日「6月5日の空襲被害状況，県市両当局に報告す。今日も又父を亡へる教子の来たりしみじみ語る。」

生徒だけでなく教員の士気の低下が浸透していく様子が記されている。[29]

（3）神戸市立第三女子商業学校

男子商業学校は工業学校に転換させられたが，それとともに女子の商業学校に転換させ女子事務員の養成に寄与することが要請された。このため44年4月神戸市立第三女子商業学校が開設された。この学校では4年生は鐘ケ淵工業兵庫工場，3年生は兵庫電話局，神戸中央電話局，神戸造機工場へ動員された。

4年生は鐘紡合成ゴム工場に勤務した。ある生徒は次のように語っている。「全員長靴，手袋，ゴム前掛，防毒マスクを使用して，青酸ガス，亜硫酸ガスの発生する工場で一途に一心に，お国のためと頑張り通した。工場の現場従業員は出征その他で減員し最後は学徒動員の生徒だけの力で動いている状態」だった。2月4日の空襲では怖かったが幸い怪我もせずにすんだ。その時に工場の大部分は焼失した。44年10月から12月まで寮生活があった。布団のたたみ方，言葉遣い，掃除など厳しい戦時中のやり方だった。鐘紡兵庫病院で救急看護の実習も受け，包帯巻，消毒，皮下注射などを習った。3月17日の神戸大空襲の日まで工場に

でかけた。

3年生のうち電話局に動員された生徒は4月～6月に湊川電話局，兵庫電話局で電話交換の技術養成を受け，7月から兵庫電話局，神戸中央電話局市外課で交換業務に就いた。兵庫電話局は3月17日の空襲で焼失したため生徒は市外交換の実習を受け5月から市外交換台に就いた。神戸中央電話局市外課も3月の空襲で焼失したため元町分局で加入カードの整理作業に従事し5月から交換に従事した。

神戸造機には50名が動員された。ある生徒は次のように思い出を語っている。「手作りの折畳み帳に毛筆で筆写した軍人勅諭を手にカーキ色の作業服「学徒報国隊」と記した白鉢巻に腕章，救急袋を肩に整列し，勅諭奉唱から始まる毎日の朝礼」があり，それから受け持ち作業場に散っていく。およそ女学生には想像もしていなかった毎日だった。「仕上班，鋳造の二班に分かれ毎日，自分達のしていることが戦争に役立って居るという情熱と，何処に在っても女商生らしくという誇りを持ち，兎角「けな気」という言葉がぴったりの日々でした。」3月の空襲で工場が被災し生徒は学校に戻った。5月から市内銀行に分散動員された。

45年度の新2年生115名は，市内の損害保険会社に17か所に分散して動員された。[30]

（4）兵庫県立神戸第四中学校

川崎航空機工業の二つの主力工場である明石と各務原工場に対する空爆は生産力を減退させるという点でモデルとなったものであった。最初の攻撃でひどい打撃を被ったので航空機の生産で二度と再び大きな役割を演じることはなかった。1945年1月19日，明石工場（機体及び発動機工場）は500ポンド高性能爆弾で攻撃され，建物は破壊された。破壊は建物の40％に及んだ。6月22日，26日にも攻撃された。兵庫県立神戸第四中学校の生徒たちは1月19日の空襲に見舞われることになる。

ある生徒の回想。西明石駅が川崎航空へ通う従業員の専用駅で，駅の出札口はすなわち，工場の門であった。素晴らしい大きな工場であった。陸軍軍用機の発動機工場，機体工場，エンジンの試運転工場，風防工場等が整然と広い道路に並び，数機の発着可能な飛行場を備え，工場内に連絡バスも走っていた。「川崎航空はすごい会社だと思っていたし，私たち青少年は愛国心に満ち溢れていた」。発動機工場に配属され，生徒たちは旋盤，ボール盤，研磨盤等を受け持たせられ1台の機械で部品を少しづつ加工しながら次の機械に送っていった。夜勤から昼勤，昼勤から夜勤へ1週間交代であったが，ゆっくり休める日がなかった。夜勤明けで家に帰って眠り午後2時に起きて新開地に映画を見に行ったりした。動員された女学校には田辺高等女学校，那覇高等女学校があった。

生徒の一人が詳しい日誌を残している。44年6月21日明石工場入所式。1週間ほど教育訓練があったようである。日誌の初めの頃は学校への登校日が記載されている。就業時間はだいたい10時間程度であったようである。夜勤が10月26日から始まった。アイスクリーム，トコロテン，干バナナ，桑の実の菓子，石鹸，ゴム草履などの配給があった。工場の給食は，「大豆ばかりの様な飯であって，大豆を食ったのか米の飯を食ったのか判らない。」神戸第四中学校だけでなく小野中学校，社高等女学校，野田高等女学校などからも動員があったことが記されている。

12月24日から「トンコ」の記事が日誌に表れる。1月18日「この頃トンコ者多し，今日も安東先生に数人見付かった。」1月19日の空襲の後も「トンコ」の記事は多い。1月31日「午後明石へ作業衣を取りに行くと称してトンコ，午前中仕事せず（仕事無し），3月10日「安東先生居らず，15・50分の電車でトンコ」，14日にも「13：00約10人でトンコ」などの記事がある。「トンコ」とは仕事をサボって帰ることをいう生徒たちの隠語なのであろう。

トンコとともに「仕事無し」や「アイドル」の記事も多い。生徒にやらせる作業がなかったりしたのであろう。「アイドル」は作業がなく生徒たちを正式に帰らせることなのであろう。「仕事無し」はやるべき仕事はないが退勤してはならなかっ

たのであろう。おそらく空襲の影響や材料の不足などによって生産が円滑に行われず待ち時間が増えていると思われる。４月17日「仕事無く，使役でケース運搬，土運びをやった。」，20日「現場は流れを止めているので仕事も無く，午前中は外でぶらぶら，午後警戒警報で退避後，宇治田氏がアイドル証を貰って退社，明石発14：43で帰宅」。

神戸の空襲については，２月４日「空襲警報，退避。神戸空襲計 B29，85機」。３月17日の神戸空襲の日は「川崎航空には出勤せず。神戸の火事場へ行く」と記載されている。３名が自宅で死亡した。５月11日「川西航空機（午前10時）列車神戸以東不通，トラックで16・45退社」。警報や空襲で生産がストップしていることも多い。

この生徒は，四中の生徒３人が犠牲になった１月19日の空襲について詳細に書き残している。13時20分警戒警報発令，悠々と B29 が飛来し爆弾投下。日本の迎撃機もなく高射砲も発射されない。発動機工場の方から一面に煙が上がっていた。B29 の第二陣はこちらに向かってきた。高射砲は発射されたが命中しない。爆弾がザーと投下され，無我夢中で壕に入った。壕の近く20〜30メートルの所に落ちた。「外でやられた者もいた」と言う者があった。３回目の爆撃では壕内はグラグラゆれたが，幸いに近くには落ちなかった。空襲が終わると，５人の負傷者が並べられていた。線路北の民家から戸板を借りてきて，焼け残った会社の食堂に負傷者を運んだ。それから負傷者を会社の寮やさらに明石の外科医まで担架で運んだ。

この空襲で４中生の死者は３人，重傷は２人であった。[31]

（５）学校工場

学校工場は堅牢な建物を求め疎開したい企業の希望，生徒たちをできるだけ身近な場所で，学校の監督ができる場所に留めたいという学校や保護者の意向などが合致して工場化が実施されたものとみることができよう。甲南高等女学校の場合，1944年６月に３年生以上の生徒は工場に出動すべきことになったことを父兄に伝えると，父兄は女子を工場に出さなければならないことに難色を示した。このため学校の工場化を模索してその実現に奔走した。「姫路第二海軍衣糧廠東洋紡姫路工場甲南分工場」ということで海軍，兵庫県庁も了解した。早速ミシン，縫衣材料等が搬入された。さらに45年４月には講堂を工場化し航空部品の製作が行われた。しかし６月５日の空襲で校舎全体が焼失したのである。[32]

5　勤労動員をめぐって

米国戦略爆撃団は，「神戸では，中等学校の生徒は全部1944年の後半には勤労動員されていた。たいていの場合，彼らは教師の軍国主義的な指導のもとで働いた。しばしば学校に持ち込まれた機械で。その結果空襲の時期にも出勤率や生産能率は著しい安定性を示した。」三菱電機について「動員学徒は空襲の時期に大いに満足のいくものであったことを証明した。教師のもとで学校の建物で十分資格があり訓練されている作業に従事した。作業能率は大人よりもはるかに高いままだった。」などと分析している。[33]

勤労動員の思い出は様々である。『兵庫県教育史』，『神戸市教育史第二集』はいずれも動員学徒や付添い教員の勤労動員の感想を掲載している。「他の事務に行っていた友だちを見ると，制服のまま事務をして楽しそう。その反面，私達は工員さんと同じように働きひどい差だと思った。…丈夫だからがまんして働けば，少しでもお国のために役立っているんだという純粋な気持も半分あり，あきらめて働いた。またこんな空気の悪い所で働いて，胸の病気にならないかなど心配もした。」「学徒動員を使命のように思い，一生懸命社会人と一緒に油や汗にまみれ，一台でも多く私たちの手によってできた飛行機で敵機を撃墜させ，一日でも早く勝利をあげていただきたいと願いつつ，なれない仕事にも力をこめ，学習も一時中断して全員がんばった。男性の徴用工・工員さんが多かったため，学徒動員の人を別扱いに大切にしてくださったことはうれしかった。」工員との関係，特

に女子工員が多い職場での関係は微妙なものがあったように思われる。兵庫県立神戸第二高等女学校のある生徒は次のように思い出を語っている。「生まれてはじめて工場で働くことになりました。鐘紡兵庫工場，わたぼこりのひどいところでした。年をとった班長さんは，『あんたたちみたいな学校へ行っているお嬢さんまで働かせてもったいないな。気をつけてや。』と親切にしてくれたけれど，その上の主任がまわってきて，さぼっているとやっぱり叱られます。朝工場に入ったら早く昼にならないかと思い，昼休みが終わると早く五時半にならないかと思い，毎朝起きる時，今日は休もうかといいながら，それでもどうにか起きて工場へかよったものです。一日中立って働くことのつらさ，機械の間にすわってしまいたいぐらいでした。また何かあるごとに「学徒は成績がよくない。」と工員たちと対抗させる。」同年齢に近い女子工員が多いことから比較されたのであろう。工員はこの苦しい作業が本業であり，それから逃げることはできなかったのである。学徒の動員は一時的なものに過ぎなかったし，一定期間が経過すれば解除されるものといえる。この生徒の感想は社会に対する認識がやや甘いという気がするが，労働とはこういうものだという認識を持ったに違いない。(34)

次にサボりや怠業の問題がある。神戸市立神戸第一商業学校では，すでに見たように「怠けねば損だ」という風潮が生徒だけでなく引率教員の間にも蔓延していた。教員が工場に出勤しないこともあったのである。兵庫県立神戸第四中学校では，「トンコ」という隠語が使われていた。引率教員の目を盗んでしばしば「トンコ」が実行されたのである。勤務には就いているが何もすることがない「仕事無し」ややるべき作業がなく帰ってもいいという「アイドル」の時間があった。生産が継続的に行われず，工員自体が欠勤し，勤務規律が弛緩していたことが生徒の怠業傾向に影響を与えたのであろう。

それでも全体としてみれば多くの学徒は与えられた作業に使命感を持って取り組んだと思われる。この時期，青少年の間に非行化傾向があったといわれ，赤澤史朗氏はその原因として労働条件，生活条件の劣悪さ，学校・社会・家庭における教育力の低下をあげている。学校史をみる限りでは動員学徒の非行とみられるほどのものは記述されていないが，動員学徒と少年工員との差があるのかなどが検討されねばならない。(35)

おわりに

再び小松左京について。小松の戦争体験，勤労動員体験は教師の暴力と分かちがたく結びついている。「戦時中はとに角，よく撲られた。撲られるだけのことを確かにしてはきたが理不尽な撲られ方もした。…私たちが入る少し前から急にそうなり，軍国主義に伴って，どんどんひどくなっていったようだ。」エリート校である兵庫県立神戸第一中学校の校風になじめず，鬱屈した気分がマグマのようにたまっていたという。そういう視点から小松は，勤労動員や空襲，中学校教育などを眺めたのであろう。かといって反戦思想の持ち主ではなく，軍国歌謡も愛唱し感動する生徒でもあったという。しかし使命感を持って労働に邁進するタイプでもなかったようだ。そうした立ち位置から小松の戦争を題材とした作品群が生み出されてきたように思う。(36)

戦争の時期にはわずかな年齢の差が遭遇する体験の大きな差となっている。小松よりも5歳年下ならば学童疎開や縁故疎開が待っていただろう。逆に5歳年上であれば戦場に赴いたであろう。小松の年齢の前後の者たちが勤労動員されたわけだが，工場での作業という体験がその後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。

勤労動員とは何であったのか。「勤労即教育」はご都合主義の教育だったのか。工場に動員された生徒たちはどのようにその体験を振り返っているのか，単なる被害者意識なのか，など検討すべき課題は多い。何よりも勤労動員について明らかにすべき基本的な事柄がいまだ十分に解明されていない。

しかし今回の執筆にあたって，社史では三菱電機，国鉄鷹取工場，学校史では兵庫県立長田高等学校，兵庫県立星陵高等学校，神戸市立神港高等学校など優れた記録に出会えたことは幸いであった。未曽有の経験を記録に残そうとした先人の真剣な努力に感謝しなければならない。神戸の勤労動員の歴史とそれが果たした役割の研究はまだまだ未開拓である。文献，資料を渉猟して，勤労動員をさらに解明していきたい。

注

（1）『小松左京全集１～46』（城西国際大学出版会，2007～2016年）。ほかに東浩紀編『小松左京セレクション１　日本』（河出文庫，2013年）など。なお，1931年生まれの作家には高橋和巳などが，1930年生まれには野坂昭如，開高健，妹尾河童ら，1932年生まれは小田実らがいる。

（2）『小松左京自伝』（日本経済新聞出版社，2008年）９～27頁。

（3）神戸市産業研究所編『神戸市産業統計要覧』(1932年）１～５頁。

（4）「神鋼五十年史」編纂委員会編『神鋼五十年史』（1954年）131～134頁。「持株会社整理委員会等文書　神戸製鋼所関係書類其の一」（アジア歴史資料センター）。

（5）川崎重工業株式会社百年史編纂委員会編『夢を形に　川崎重工業株式会社百年史（資料・年表）』（1997年）278～281頁。

（6）「昭和十三年七月四日（書面審査）臨時資金審査委員会議案」第一号議案(アジア歴史資料センター)。川崎航空機工業に関する詳細な分析は，USSBS, *Kawasaki Aircraft Industries Co, Inc. (Kawasaki Kokuki Kogyo Kabusshiki Kaisha)*, 1947. を参照。

（7）新明和工業株式会社社史編纂委員会編『社史Ⅰ　新明和工業株式会社』（1979年）45～76頁。なお洲脇一郎「1945年５月11日の空襲と学校」（神戸親和女子大学『児童教育学研究』35号，2016年３月）で川西航空機甲南製作所に対する空襲を取り上げている。

（8）神船75年史編集委員会編『三菱神戸造船所七十五年史』（1981年）15～21頁。三菱重工業株式会社編『三菱重工業株式会社史』（1956年）273～279頁。

（9）三菱電機株式会社社史編纂室編『三菱電機社史　創立60周年』（1982年）39～63頁。なお三菱電機株式会社編『建業回顧―三菱電機株式会社史　満三十周年記念出版』（1951年，復刻版は2000年にゆまに書房から出版）は昭和恐慌後の会社の発展，工場の新設等を簡潔に叙述するとともに，電気技術の革新については詳しく述べている。

本文は戦争で成長した産業をとりあげているが，その一方で「犠牲産業」があった。神戸で代表的な企業として鐘淵紡績がある。戦時下に鐘紡は業容の転換を余儀なくされ軍需産業への進出を模索する。化学工業や航空機部品事業への進出や兵庫精密機械工業の新設などであった（鐘紡株式会社社史編纂室『鐘紡百年史』1988年，363～393頁)。

(10) 東京市政調査会編『日本都市年鑑　第12』（1943年）417，418頁。

(11) 前掲『三菱神戸造船所七十五年史』21頁。

(12) 前掲『三菱電機社史』59～62，70，71頁。

(13) USSBS, *Effects of Air Attacks on Osaka-Kobe-Kyoto*, 1947, pp.227～237.

(14) 鷹取工場60年史編集委員会編『六十年史』（1962年）125～128頁。

(15) 戦時下の労働力需給については，梅村又次他『長期経済統計２　労働力』（東洋経済新報社, 1988年）142～149頁。日本の工場疎開については，例えばコーヘン著，大内兵衛訳『戦時戦後の日本経済』上，下（岩波書店，1951年）を参照。

(16) ibid. *Effects of Air Attacks on Osaka-Kobe-Kyoto,* pp.188～193.

(17) USSBS, Kobe Seikosho: Report No.39y(2).

(18) USSBS, Report No.1: Report No.19c(1).

(19) 前掲『三菱神戸造船所七十五年史』。

(20) USSBS, Brief historical outline of Kawasaki Heavy Industries,: Report No.48c(8).

(21) 前掲『三菱電機社史』58，59頁。

(22) 前掲『六十年史』118～121頁。

(23) 同上128～134頁。

(24) 文部省編『学制八十年史』（1954年）390～403頁。『学制八十年史』はいまだ敗戦の記憶が薄れない中で官庁の著作物としては極めて率直な記述がみられる。

(25) 兵庫県教育史編集委員会編『兵庫県教育史』(1963年）667～673頁。

(26) 神戸市教育史編集委員会編『神戸市教育史　第二集』（1964年）92～106頁。

(27) 前掲『三菱電機社史』70～73頁。「ああ紅の血は燃ゆる」の歌詞は金田一春彦・安西愛子編『日本

の唱歌　（下）』（講談社文庫，1982年）274，275頁。

(28) 兵庫県立長田高等学校校史資料編集委員会編『校史資料編　戦争中・直後編』（1950年）9〜74頁。

(29)『神港六十年』（1967年）122〜138頁。

(30) 前掲『神港六十年』247〜253頁。

(31) 兵庫県立星陵高等学校五〇周年記念誌編集委員会編『兵庫県立星陵高等学校五〇周年記念誌』(1991年）295〜320頁。

(32) 甲南女子学園創立三十周年記念誌編集部編『甲南女子学園創立三十周年記念誌』16〜18頁。

(33) ibid. *Effects of Air Attacks on Osaka-Kobe-kyoto,* p234.

(34) 前掲『神戸市教育史　第二集』102〜104頁，『兵庫県教育史』669〜671頁。

(35) 赤澤史朗「太平洋戦争期の青少年不良化問題」（『現代日本の教育史 6 』所収，2014年)。

(36) 神戸高校100年史編集委員会編『神戸高校百年史―同窓会編』（1997年）に小松左京の談話が掲載されている（270，271頁）が，そのタイトルは「撲られ放しの青春」となっている。また前掲『小松左京自伝』 9 〜27を参照。